

団塊のカタログ

トシタロー・クラフィティ

前号に引き続き昭和31年である。

我が心のプレスリー

1954年（昭和29年）にザッツ・オールライト・ママでローカルデビューしたエルビス・プレスリー、この年リリースしたハート・ブレイク・ホテルが文字通り大ブレイク、全米ヒット・チャート1位に8週連続、続いてハウンド・ドッグも6週連続と、出す曲すべてが大ヒットするこれぞアメリカンドリーム、イッキに全国区にのしあがった。

その勢いはスさまじく、9月にはあの「エド・サリバン・ショー」にも出演、紅白歌合戦も真つ青の視聴率82.6%をたった1人でモノにした。（ビートルズも同じくらいの数字だったと思うが、なんせ4対1）

リーゼントと皮ジャン(!)がトレード・マークで、いうまでもなく日本の若者もすぐマネしたが、もともと長身・長足の欧米人向きファッション、チビ・短足・胴長の日本人にはムリがある。その意味では太陽族の慎太郎刈りとアロハ・シャツの方が体形的にはしっくりするが、キッチュ（俗悪、まがいもの。早い話が不良）どもが集団でコピーしたがるのは今も昔も変りはない。

皮ジャンは永遠のファッションだし、リーゼントも若者のヘア・スタイルの原点として残るだろうが、太陽族のグラ・サンはともかく、今時アロハ・シャツや慎太郎刈りでイキがっているイモはいない。

1930年代のビング・クロスビー、40年代の

フランク・シナトラ、50年代のプレスリーから60年代のビートルズへと引き継がれていったが、70年代・80年代・90年代とビッグ・スターが登場してこないまま今世紀も終わろうとしているのは寂しい限りだ。

そのエルビス、ビートルズが解散した翌年の1971年（昭和46年）に映画「エルビス・オン・ステージ」で華々しくカムバックしたがその6年後の1977年にテネシー州メンフィスで急死する。

それもドーナッツの食い過ぎが原因の心臓発作ということだから情けない。

Elvis, King of Rock'n Roll, was dead...
そんな白抜きの大見出しがいきなり目に飛び込んできたのを今でもはっきり覚えている。

享年42才であつたが、死してなお永遠のアイドル、今でも命日にはアメリカで何らかのイベントが大々的に催される。

エルビスの頃は45回転のドーナッツ盤EP（Extended Play 拡張演奏盤の略。奇しくも**Elvis Presley**と同じ）だったが、今はCD（Compact Disc）の時代だ。録音・再生の面でもそうだが、電子楽器の改良など、技術の進歩には目覚ましいモノがあるが、だからといって本質的な変化には結び付かない。

音楽の基本はメロディー（旋律）・リズム（律動）・ハーモニー（調和）である。

最近はビジュアル系が大流行、楽しみ方の幅が広がったのはいいが、機械に振り回されていてついていけない一方で、シナトラもエルビスもビートルズも絶頂期は不良音楽、大人たちが眉をひそめていたのも事実である。

理由なき反抗

ジェームス・ディーンの2本目の主演作品「理由なき反抗」もこの年。

この映画を見たのは高校生になってからだが、どこかで見たような女の子がジェームス・ディーンの恋人役で出ていると思ったら、**ウエストサイド物語**で主役のマリアを演じた**ナタリー・ウッド**であった。

「いいわヨ」という女の口の合図で不良2人が崖に向かってクルマを走らせ、落ちる寸前で飛び出すのだが、これが早い奴ほど意気地なし（チキン）としてバカにされるところからチキンレースというのだ。

ジミーは主人公の貴族で直前に飛び出すが、もう1人の不良はドアのノブに袖が引っかかってしまい、高い崖からクルマごと落ちてしまう。この**いいわヨ**（Ready, Go!）の女の子が**ナタリー・ウッド**だったのだ。

同じような驚きは**34丁目の奇跡**（1947年。ほのぼのとした名作）をテレビで見た時にも感じた。当時9才、おクチもおハナもちよつと上を向いていて、このかわゆいコはどこかで見たことがあると思ったら、これもナタリー・ウッドであった。予期せぬ驚きは確定すれば喜びに変わって、結構トクしたような気分にはたれるから不思議であるが、それ以外は別にどうってことはない駄作。

むしろ「太陽の季節」よりはマシ。

海底二万哩

徹底して子供たちにターゲットを絞り、アニメの他には記録ものか動物もの、そしてSFものしか製作しないのがディズニー・プロの哲学であるが、その実写SFの古典的傑作が「**海底二万哩**（マイル）」だ。

舞台は1868年（明治元年!）宇宙へ飛び出すのと同じくらい、海の底も地の底も謎だらけだった時代が背景である。

いきなり蒸気動力の帆船が出てくるものだから、それだけで古臭く感じてしまうこの映画、そこに怪しげな潜水艦が登場して、次から次へと通りかかる船を沈めてしまうというところから物語は始まる。

フランスのSF作家ジュール・ベルヌ（1828~1905年）が、1869年（明治2年）に発表した同名のSF小説が原作であるが、今見るとやはり古臭く感じてしまう。

原作発表時には空想の産物だった潜水艦だが、この映画が製作された時点ではすでに現実のモノになっていたし、チャチな特殊撮影（ミニチュア・合成）だったから、それもやむを得ないだろう。

ワシもそうであるが、映画に限らずSF大好き人間は結構多い。

細かい数字やムズかしい理論がやたら出てくるとイヤになってしまうが、そこらへんが大ざっぱだと大衆に受け入れられる。

この**海底二万哩**のように潜水艦のない時代に潜水艦を登場させ、飛行機のない時代に気球と汽車と汽船を乗り継いで**80日間世界一周**（1873年）しているが、いずれもとつくに現実化されている。ベルヌ先生の予想と予測をはるかに超える科学の発達ぶりだが、100年前には間違いなく夢物語であった。

主役は**カーク・ダグラス**（マイケル・ダグラスのお父さん）、ディズニーの映画では人間は常にワキ役で、主役は潜水艦と当時としては最新鋭のSFXである。

その名も**ノーチラス号**、我らが小学生になった1954年（昭和29年）に進水した世界初の原子力潜水艦の名前は無論ここからとったのだが、それすら過去の遺物、近未来SFはツラいものがある。再映画化はないだろう。

禁断の惑星

いわゆる**ロボット**には、人間型と非人間型の2種類がある。前者の代表は**鉄腕アトム**で一見して人間でないのは明らかだが、それでも外見は限りなく人間に近い。

これが「Dr. スランプ」のあられちゃんになるとほとんど人間だが、外見上は人間ソックリで人間より優れているのが人間型ロボット（正確にはアンドロイドというらしい）であるのに対し、非人間型は人間に近づく努力を一切あきらめ、人間にはない性能の向上にただひたすらハゲむ。

鉄人28号や**マジンガーZ**とか**ガンダム**などの大型ロボットがそうだが、いずれも人間の操縦なしでは動けない。**コンバトラーV**とか**ゲッター・ロボ**のような合体型もあるが、これらは基本的には戦闘用だし、どれもマンガが原作だからアニメ化されてナンボ、実写だと結構情けなかつたりする。

良い例が「鉄腕アトム」で、3回ばかりテレビ化されているが、初代は静止画面、2代目は実写版で、どちらもオソマツの一言。

後ろのジッパーがやたら目立つウルトラマンもどこか納得いかない。

逆に、動物性をはっきり表面に出したゴジラやキングギドラ迫力あるように、実写モノは人間に近ければ近いほど難しいようだが、「スター・ウォーズ」の**C3PO**^{スリーピー}や**R2D2**^{アーツディーラー}ははっきりロボットとわからせて成功している。前者は言葉もしゃべれるし、外観もほとんど人間に近い。それゆえヒューマノイドとも呼ばれるが、一方のR2D2は機能性重視に徹している作業型ロボットで、ピコ・ピコ・ピコの電子音でしか話せない。

おしゃべりのC3POがツッコミで無口のR2D2がボケの掛け合いマンザイが映画を面

白くしている。このあたりのユーモア感覚はさすがで、日本人には思いつきもしないだろうし、真似したところでヤボったくなるのは目に見えている。

さて、C3POほど人間的ではないが、R2D2のようにまるっきりの作業型でもないのが「**禁断の惑星**」の影の主演、**ロビー**君である。これは江東楽天地にある江東リッツ劇場で見たのだが、子供向けにもかかわらず恐怖の「字幕スーパー」であった。

そもそも読める漢字の絶対数が少ないから字幕を追えば画面を見逃す、画面に気を取られればセリフがわからない、そんなこんなであまり面白くなかったが、ロビー君が登場するシーンは納得いった。

なにしろしゃべらないから、安心して画面に見入っていられる。このロビー君、全体がクワッぱいボディーで出来ているのだ。

手は胴体から二ヨキッと突き出るように飛び出ている、指は先の割れているリング状をしているから、つかむ動作しか出来ないし、足は動かせず、歩く時はローラーだ。

もうおわかりだろう、ロビー君こそR2D2のご先祖様なのだ。同様に丸い頭だが、これはちょっと違ってて、円形の透明プラスチックで覆われているスケルトン・タイプで、内部のメカが見えるのが科学心をそそる。

もっともらしい歯車とかピストンなどが上下に動いたり回転している様がいかにもSFっぽくて、映画そのものよりはるかに子供たちに人気があった。ガキ共に人気があるとすれば、オモチャ業界が黙っているわけはなくロビー君はただちに商品化された。

当時としてはこれしかないブリキ製、ゼンマイで動くちゃちなオモチャだったが、これが男の子のメカごころをとらえた。

やがて電動式になり、それにリモコン装置がついたり、オモチャの世界の進歩は早く

そのたびにニュータイプが欲しくなるから、親たちもたまったものではない。

ワシが親の立場になった時にも同じことがくり返されたが、いつの時代でもロボットは男の心の永遠のアイドルのようである。

そう苦笑いしてサイフのひもをゆるめた団塊の世代のお父さんも多かつたろうが、その原点ともいうべきロビー君、もともとはチェコの作家チャパックの造語ROBOTにちなんでROBYと命名されたのに、今ではすっかり忘れられているのは実に不憫だ。

昭和42年に発売されたリカちゃんガ女のコに根強い人気があるのに比べると、男のエキッぽさが目に付いて、なんとも情けない。

続・貸本と劇画

さて、再びゲキガである。

貸本作家の長老格辰巳ヨシヒロさんが32年に命名したとされているが、その後の漫画界に与えた影響は決して小さくない。

まず、作者自身が変身した。

ウラの貸本誌からオモテの月刊誌に初めて登場したのは白土三平さんだっと思うが、昭和36年から月刊少年に連載された**サスケ**はその象徴といってもいいだろう。

その「少年」が廃刊されれば、今度は「少年マガジン」に「ワタリ」が連載されるといった具合に、貸本作家の残党は着実にオモテの世界に進出していった。

もともと実力あるセンセー方ばかりだから大手の出版社も放っておくわけがないし、いったん世間に受け入れられれば人気は後から黙ってついてくる。

隔週刊誌「ビッグ・コミック」に登場して30年以上、同誌の看板として我が国最長不倒連載を誇る「ゴルゴ13」の**さいとうたか**さんなどはその典型で、当時貸本誌「影」の

エース的存在で、愛嬌ある太めの体格からゴリラと呼ばれていた作家であった。

その「ゴルゴ13」のケツにさいとうプロのスタッフがズラッと紹介されたことがあるが、懐かしい作家の名前が見られた。

石川フミヤスとか**K・元美津**などで、特に後者の「**針剣太郎**」シリーズなどはしゃれたタッチの都会派ハードボイルドでかなりのもの、今でも充分通用する。

不朽の名作「子連れ狼」の**小島剛夕**は「怪談」の、「ドカベン」「男どアホウ甲子園」「あぶさん」でおなじみの**水島新司**は「オッス」（日の丸文庫。「影」の弟分）のそれぞれ看板作家で、さらに「巨人の星」の**川崎のぼる**、「ワル」の**影丸大也**、「漂流教室」と「まことちゃん」の**椋田一雄**らはいずれも貸本誌の出身である。

こんな貸本誌と貸本屋であったが、週刊誌や文庫本の読み捨て文化には勝てず、40年代に入ると一般の月刊誌共々消えてしまう。

作家の皆さんも少年週刊誌で活躍するが、我ら団塊の世代の成長に合わせてくれたのが今では大人向けの週刊誌でしか見られないのは何ともサビしい限りだが、週刊少年〇〇に連載されているストーリー漫画はほとんどが劇画タッチだし、過激度・残酷度・エッチ度などは今の方がよっぽどスゴい。

今あらためて「影」や「魔像」を見たところで、当時の愛読者であったワシらも今のガキどもも別に驚きはしないだろう。

それでも当時は新鮮だった、なんてものはいつの時代にもある。

その「影」も昭和41年9月をもって休刊、「シャドウ」と改称して、今度は「売り本」としてホンの一時書店にならんでいたが、いつの間にか完璧に消えてしまった。漫画に物語性を持ち込んだのは手塚治虫で、漫画をぶち壊したのが劇画、という今は昔の物語。